

# トッピングシエアへの道

□ 1 □

独自の技術やアイデアを磨いたり、大手が手を出しにくいニッチ(すき間)を狙ったりして市場を切り開いた県内企業がある。トッピングシエアを獲得、あるいはうかがう位置まで駆け上った道のりに何があったのか。「決断 攻める県内企業」第2シリーズは、市場の将来性を見極め、社運を懸けた背景を探る。

食品工場の製造ラインで、食の安全を守る関門となる異物検査機。システムスクエア(長岡市)は、大手5社が市場を独占していた検査機業界に最後発で参入し、高い技術力とデザイン性を武器に販路を拡大、金属検出機でトッピングシエアを狙える位置まで急成長した。

## 異物検査機

# 食品会社集積決め手

## 大手しのぐ機能、デザイン

同社は1989年に創業。当初は、山田清貴社長(88)が社員時代に培った技術を基に、特殊なコンピュータや半導体検査機の部品を作った。「浮き沈み

と思っていた」

技術を磨く一方、「コピーできない」「エンドユーザーが近い」「海外でも通用する」などの20項目を掲げ、社運を懸けられる製品を探した。

創業から5年。食品関連業界から中途入社した社員が、金属検出機の開発を進

出した。

◇ ◇

金属検出機は、金属の混入した食品が装置内のコイルを通る際に現れる磁界の変化を捉える仕組みだ。同社は鉄用の低周波と非鉄用の高周波の2本で同時検査する技術を完成し、高精度を売りに大手の厚い壁に挑んだ。

◇ ◇

しかし、無名の会社の参入は容易ではなかった。月に1台売ればいい方。3年ぐらいは商売にならなかつた」と山田社長。「展示

め細かいフォローも評価された。これを機に同社の名前が広まる。今では金属検出機で第2位のシェアを獲得。県内食品工場の半数が使うまでになった。

産業用機器にもやはり廃りがあり、検査機も例外ではない。食品業界では、金属以外もチェックできるX線異物検査機の導入が進む。金属検出機で売り上げを伸ばした同社だが、仕組みが異なるX線検査機で

な同社が描いた戦略は、「展無理」と言う現場とやり合示会などでハッと目立つてきた」という。2009年にニイガタIDSデザイン担当部署を新設し、デザインコンペで大賞。翌10年にはグッドデザイン中小企業長官賞を受けた。狙いは当たらず、洗練された外觀のX線検査機を生み出す。会社

山田社長は「既に(X線検査機)次の戦いの準備中。大手がやるのは安定した市場があるから。中小だけじゃなく、堂々と勝負したい」と語った。

ます」

未知の分野だったが、調査すると20項目のうち18項目に該当した。それまで製品化を進めた中で突

出して高かった上、本県に食品会社が多くあることが決め手となった。「いけ

や見本市で関心を示してくれたメーカーには、無料で置いてきた」と振り返る。

は、再び一からの出発となった。

使ってもらえば必ず違いが分かる、との自信を胸に耐えた。やがて、使い勝手

の良さを認めた県内大手菓子メーカーが、約100台の大量注文をくれた。県内

X線異物検査機のテストをする山田清貴社長(右)。

デザイン性と機能性の重視がヒット商品を生んだ。長岡市新産3のシステムスクエア



# 決断

攻める県内企業